

非代償性災害時におけるトリアージが招く「命の選別の問題」に対する二河白道を基盤とした非身体的側面からのケアリングの模索

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 今井, 崇史 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/351

非代償性災害時におけるトリアージが招く 「命の選別の問題」に対する二河白道を基盤 とした非身体的側面からのケアリングの模索

The Problem of “Triage” in an Uncompensated Incident: A Pilot
Study of the Approach Based on “Niga Byakudō”
(White Path to Pure Land across Two Rivers)

今 井 崇 史

IMAI Takashi

〈キーワード〉 非代償性災害、トリアージ、全人的苦痛、QOL、二河白道

1. はじめに

近年、大規模災害時における「こころのケア」の重要性が指摘され、罹災者の非身体的側面からの支援の注目が高まっている。特に、先に発災し現在も進行中とされる東日本大震災を契機に、罹災者の非身体的側面に対して、罹災者に対する物質的、身体的側面のサポートからの模索や、東日本宗教者ネット、キリスト教、仏教両方の宗教者たちによる「心の相談室」の開設等を始めとした心理学以外の分野からのサポートの模索も行われている。特に、この情勢に対し、浄土真宗では、社会実践活動である「ビハーラ活動」が取り組まれている。しかしこれらの模索は、今後の情勢のさらなる総括により徐々に明らかになる事を待たねばならないが、これらの側面からのサポートは、個々の取組及び散発的かつ限定的な取組に留まると現時点で言える。このことは、未だ、仏教を基盤としたスピリチュアルケア、すなわち主に人間の生きる意味・指針に関わる苦悩の側面に対するケア、の行動判断基準や各々の現場における役割も明確であると

非代償性災害時におけるトリアージが招く「命の選別の問題」に対する
二河白道を基盤とした非身体的側面からのケアリングの模索

は言い難い事を意味しよう。

また、災害医療の分野では、大規模災害の発生時に、医療サポートに対する需要が供給を上回る情勢を「非代償性災害」と捉える。そして、限られた人的資源や医療資源を最大限かつ合理的に配分するために、傷病者を症状に応じて搬送順位を決める「トリアージ」が実施される。しかし、トリアージの基準に対する判断や捉え方が多様であることから、傷病者の搬送順位の振り分けの結果を巡り、本人や家族、そして振り分けに携わったスタッフに身体的・非身体的苦悩を与える、いわゆる非代償性災害時の「命の選別」の問題が引き起こされるとされる。そして、この命の選別の問題により抱えとされる罹災者の非身体的側面の苦痛に対し、仏教を基盤としたスピリチュアルケアを行う為の行動指針や倫理価値判断基準の明確化は殆ど図られていない¹。

筆者は上記の背景を鑑み、2010年よりこれまで、トリアージにより生起する罹災者の不快な情動に対する浄土教を基盤とした非身体的側面からのケアに関して予備的検討を重ねてきた。この検討により、①災害や病院、教育等の現場に対して浄土教を基盤とする仏教者が、現場のニーズに応えるべく多専門職集団で構成されたケアチームに、特に浄土教を基盤とするスピリチュアルケアを以って参画するには、浄土教を基盤とする仏教者が各々の現場における行動が果たす「可能性」・「限界性」・「責任性」を明確化する必要がある。②特にケアチームの「限界性」や「責任性」により引き起こされる「命の選別の問題」に対する浄土教を基盤とする仏教者が持つ行動規範・行動指針や、罹災者及びケアスタッフの心の折り合いの問題等のいわゆる心のケアに対して浄土教を基盤とする仏教者が参画するには、各々が拠り所としている倫理価値判断基準をより明確にする必要がある。③浄土教を基盤とするケアを行う者は、ケアチーム全体の行動指針及び行動規範の策定時や、ケアチーム内外で生ずる様々な問題に対する共

¹ 今井崇史「大規模災害時のトリアージにおける「いのちの選別」の問題」(『日本仏教心理学会誌』第1号、2010年)、136-150頁。

通の問題解決手順の策定に際し、各々の倫理価値判断基準を仏教専門用語ではなくチームの共通言語、いわゆる「共通プロトコル」に則り他のスタッフに説明する事が必要になる。④浄土教を基盤とするケアを行う者がケアチーム内で当事者性を十分に発揮する為には、仏教専門用語からチーム内外の共通言語への翻訳作業等、浄土教で説かれている教えを基盤とした痛みの定義や捉え方の用語策定・概念化が必要である事を見出した²。

そこで本論文では引き続き、日本の非代償性災害の現場における「命の選別の問題」に対する非身体的側面を含めたケアシステムにおいて浄土教を基盤とする仏教者が、特に死に臨む際に生ずる人間の抱える不快な情動に対しスピリチュアルケアを行うスタッフの一員として参画する際に必要とされる倫理価値判断基準の明確化及び浄土教の教えの痛みの定義や捉え方の用語策定・概念化を行ための予備的検討を行う。

これらの目的を果たすべく、本論文では、善導が説示した二河白道を訳出し、そして訳出した二河白道の描写理解から特に死に臨む際に生ずる人間の抱える不快な情動の解放の過程の観点及び解放に至る因子に整理することを試みる。また、親鸞は『愚禿抄』下巻にて、善導の二河白道の譬えに注釈を加えた事から善導、親鸞両者の二河白道の譬えの物語の構成要素及び因子も併せて検討する。

2. 二河白道の喩え

二河白道の譬えは、浄土三部経の一つ『観無量寿経』を註釈した善導上人（613-681）が記した『観無量寿経疏』の第4巻「散善義」にて、善導が『観無量寿経』で説かれている「至誠心」・「深信」・「廻向発願心」の「三心」に対する廻向発願心の注釈の中で説かれた譬えである。善導以前にも彼岸と此岸を河に例えたものは『大智度論』や『大般涅槃経』にも類

² Takashi Imai “The Problem of “ Triage” in an Uncompensated Incident-The Pilot Study of The Approach Based on Pure Land Practice,” 15th Conference of the International Association of Shin Buddhist Studies (2011) 学会発表等

似した断片が見られるが、一つの完結した物語性を持った譬えは善導により説かれた。「三心」は、浄土真宗聖典の卷末注によれば、『無量寿経』の第18願に誓われた「至心・信楽・欲生」及び『観無量寿経』の「至誠心・深心・廻向発願心」の三つ³を指すとされる。また、「三心」は、『織田仏教大辞典』によると、三心の至心は真実に浄土を願う心、深心は深く浄土を願う心、廻向発願心は所修の功德を廻向して浄土に往生せんと願求する心とし、この三心を具わった者は必ず往生する事ができるとする⁴。これに対し善導は、「三心」をそれぞれ、至誠心を「経に云はく、一には至誠心。至と真なり、誠とは実なり。」、深心を「深心といふは即ち是深く信ずる心なり。」、廻向発願心を、「廻向発願心といふは、過去及び今生の身口意業に修する所の世出世の善根と、及び他の一切の凡聖の身口意の業を修する所の世出世の善根とを随喜せると」、また、「廻向発願心して生ぜんと願ずる者は、必ず須らく決定真実必中にて廻向して願じて得生の想を作すべし。」⁵と説く。そして、善導は、浄土教を他の思想との軋轢から護り信心を護るための廻向発願心、獲信から往生に至るまでの様子を説いた上で改めて二河白道の譬えを説示した。

二河白道の譬えは具体的に、大きく分けて2つのパートに分かれる。まず、譬えの前半はある行者の物語を通じて浄土教の教えの獲信から往生に至るまでの描写とし、次に、譬えの後半は前半の物語の描写に対し善導自身が注釈を加える体裁に分かれる。

本項目では、善導が説いた二河白道を訳出し、訳出した二河白道の描写理解から特に死に臨む際に生ずる人間の抱える不快な情動の解放の過程の観点及び解放に至る構成要素や構成因子に整理することを試みる。まず、善導が説いた二河白道の喩えをそれぞれ、前半部分を、東岸における「行者の苦悩」、行者が白道を渡河し西岸に至るまでの「行者の苦悩の自覚」・

³ 浄土真宗聖典編纂委員会『浄土真宗聖典（註釈版）』本願寺出版社、1988年、1479頁。

⁴ 織田徳能『織田仏教大辞典』、大蔵出版社、2005年、628頁。

⁵ 『国訳一切経（和漢撰述部 経疏部 11）』、大東出版社、1989年、87-88頁。

「行者の苦悩からの解放」とし、後半部分を「行者の苦痛からの解放の因子」・「行者の生き方の枠組みのパラダイムシフト」の項目に区分し訳出することにより二河白道の譬えの構造を整理した。そして各項目にて、二河白道を訳出する事により抽出された物語を構成する要素、因子に対しそれぞれ死に臨む際に生ずる人間の抱える不快な情動の解放の過程の物語の観点からの検討を加えた。

なお、現代語訳に当たり『観無量寿経疏』の原文を『大正藏』（三十七卷）を基底に、書き下しを『国訳一切経』及び『浄土真宗聖典（註釈版）』本願寺出版社を参照した。

2.1 行者の苦悩

「又、一切の往生人等に白す。今更に行者の為に一の譬喩を説きて信心を守護して以て外邪異見の難を防がん、何に者か是れなる。」

善導は冒頭でこの譬えの目的を、浄土教以外の教えを奉ずる者からの法難を防ぐためであると述べる。そして、

（訳）行者が百千里の距離を西に向かって歩もうとすると、行者はにわかに道のりの途中に南に火の河、北に水の河を見た。それぞれ両者の河幅は百歩で、それらの河は深くて底がなく、またいくら北や南に行けども辺りはない。水の河と火の河の間に一本の白い道がある。白い道の幅は約4、5寸、そして東岸から西岸に至るまでの長さは百歩である。また、水の河の波が次々に白い道に押し寄せて道を濡らし、また火の河の火焰が白い道を焼き尽くそうとする。白い道は、水河の波浪と火河の火炎に休む暇もなく代わる代わる曝されている。そして行者は、果てしない広野に差し掛かるが人影が見当たらない。行者が独りであることから大量の群賊悪獣が、我先にと行者を殺そうとする。行者は殺されるのを恐れひたすらに走り西に向かうとにわかに大河を目にする。

まず、行者が浄土教の教えの獲信から往生に至るまでの物語の行者と行者の置かれた場面設定が行われる。この描写から、現時点で行者は東の岸にいて考えられる。また、行者が水火及び白道を見る様子を「忽然とし

て中路に二河あるを見る」と「忽然とて此の大河を見る」の二度に渡り描写されることから、行者は、歩みの初期より鮮明に水火及び白道を視認していない事が説示される。従ってこの描写は、行者はこれまで獲得した自分の生き方や拠り所が今後成立しない事や、これまで通りの生き方や拠り所の枠組みの継続・維持を図ることが不可能な事を、段々切迫かつ当事者性を以て認識せざるを得ない情勢の説示と捉えられる。以上のことから、二河白道における東岸は、行者が死ぬ事を段々自覚する段階である行者の「苦悩」の段階の説示と言えよう。

2.2 行者の苦悩の自覚

（訳）行者は「この川は南北に辺や畔が見えず、河の間に一つの白道を見ることができるが、この道は極めて狭く小さい。東と西の岸はお互い行き来できそうな程近いというものの、いかにして渡るべきか分からない。このままでは今日で死に至ることが確実である。東岸を引き返そうとすると群賊悪獣が次々と押し迫りくる。また、走って南北に逃げようとする、悪獣や毒虫が我先にと向かってくる。白道を頼りに西に向かうならば恐らく水火の河に堕ちてしまうだろう」と自ら考えた。この時の行者の恐ろしさは言葉に表すことが出来ない。まもなく行者は、「今引き返しても死に至る、ここに止まっても死に至る、逃げても死に至り、どうしても死を免れることができない。ひたすらに白道を頼りに前に向かい、東の岸から去ろう。既に白道があることから必ず渡ることができる」とにわかに思い至った。

この場面で行者は、群賊悪獣に襲い掛かれることにより、これまでの苦悩の過程が「不可逆性」・「一回限り」である事をさらに知らしめられる。そして、行者は、死ぬことから逃れられない事を知覚することにより、これまでの歩みがいよいよ立ち行かなくなる事を認識し、言葉に言い表されないほどの恐怖におののく。しかし、行者は、行者自身の置かれている状況を把握しようと努め、一度は渡れないとあきらめた白道を再び歩む事を決定する場面である。従ってこの場面は、行者が死ぬ事を自覚する

事、及び行者自身が群賊悪獣に示唆される煩悩に支配されていた事に気づく事の説示といえる。また、この気づきにより行者は、煩悩に支配されない新しい生き方の枠組みへの転換が求められる事が説示される。そしてこれらの一連の説示の過程は、行者の今までの生き方の枠組みから新たな生き方枠組への転換と捉えられる事から、この場面は、行者が死ぬ事を自覚し煩悩に支配されていた気づきを理解しようとする行者の「苦悩」から「苦痛」への段階への移行であると捉えられる。

2.3 行者の苦痛からの解放へ

(訳) 行者が「ひたすらに白道を頼りに前に向かい、東の岸から去ろう。既に白道があることから必ず渡ることができる」との想いに至った時、東岸からにわかに「行者よ、ためらうことなくこの道歩め、死に至ることは決して無いだろう。もしここに留まるならあなたは死に至るだろう」との声を聞いた。同時に西岸に人が見え「この道の歩みを疑うことなく真直ぐ来なさい。私はあなたを護ろう。水火の河に墜ちる事を畏れることはない」と喚ぶ声を行者は聞いた。行者は両者の声を聴いて行者自身の心身の行くすべを決定し白道をためらいや疑いの心を持たず真直ぐ歩んだ。

この場面は、行者自身が東岸の声と西岸の喚ぶ声を頼りに白道を歩む場面である。この事により、行者が東岸にいた生き方の枠組みとは異なる新しい枠組みの生き方の歩みを始めた場面が説示される。そしてこの場面で行者は、兩岸から白道を歩む事を勧める声及び西岸の人からこちらに来る様に勧める喚びかけである苦悩からの解放への方向性の示唆に従い、行者が死ぬ事を自覚し煩悩に支配されていた気づきを理解しようとする「苦痛」からの解放の方向に向かう過程の場面の説示と捉えられる。しかし、行者は白道を煩悩の支配から逃れられない不可逆的な過程を歩む事から、行者に不快な情動が生じる。そして、行者自身が煩悩を手放せないことを鑑みると、ここでいう行者の不快な情動とは執着であると考えられる。

(訳) 行者が白道を一歩二歩と歩みを進めると、東岸の群賊悪獣が「行者よ。引き返しなさい。この道は険しいのであなたは渡り終える事は出来

なく必ず死に至るだろう。我々はあなたに向かって悪心をもちながらこのことを言っているのではない」と呼び戻す声が聞こえる。しかし行者はそれらの声を聞くが振り返ることはなかった。そして行者は白道を一心に真直ぐに歩み、しばらくの後、にわかに西の岸に至り永遠に全ての難から離れる事が出来た。西岸では善き共と出会い慶び楽しみが已む事は無かった。これは譬えである。

と締めくくる。この場面では、東岸から郡賊悪獣が喚び戻す事により、行者に今までの生き方の枠組みに戻そうとする働きかけがなされる。しかし、行者は兩岸から示唆される苦悩からの解放への方向性に従い、行者が死ぬ事の自覚による煩悩の支配の気づきを理解しながら白道の歩みを重ね、最後に西岸に至る場面が説示される。このことは、行者の死ぬことへの理解の段階、すなわち、行者が「苦痛」から解放された状態の説示と捉えられる。

二河白道の譬えの前半はここまでである。以下、善導は譬えに対し具体的な注釈を加える。

2.4 行者の苦痛からの解放の因子

(訳) (前半の譬えのくだりを踏まえ) 次にこの譬え全体を鑑みるならば、東岸はこの娑婆の火宅の譬えである。また、西岸は極楽宝国の譬えである。郡賊悪獣が詐の心をもちながら行者に近づく事は、衆生の六根・六識・六塵・五陰・四大の譬えである。人無き空廬の沢は、悪に従って真実の善知識に遭わない事の譬えである。水火の二河とは、衆生の貧愛を水の様に、また瞋憎を火の様に譬えたものである。中間の白道四五寸は、衆生の貧瞋煩悩の中にある浄土に往生を願う清浄な心が生じることの譬えである。同時に、衆生の貧瞋が強いことを水火の様に、衆生の善心が微かなことを白道の様に譬えられる。水の河の波が次々に白い道に押し寄せて道を濡らすことは、愛着の心が絶え間なく生じる事により善心を染汚することの喩えである。また、火の河の火焰が白い道を焼き尽くそうとする事は、怒りや嫉みの心が功德の法財を焼く事の譬えである。

善導は譬えの流れに沿いながら、登場する場面一つ一つの要素に注釈を加える。

まず東岸、西岸、郡賊悪獣、人無き空過の沢、水河の二河、白道それぞれ東岸を娑婆の火宅、西岸を極楽宝国、郡賊悪獣は衆生の六根・六識・六塵・五陰・四大、人無き空過の沢を善知識に遭わない様子、白道を衆生の中に生じる清らかな往生を願う心と仏教の教義に照らし合わせて注釈を加える。これによると、白道は常に水の河の愛着が起る事により白道の善心を阻害し、火の河の火や焰は怒りや嫉みによって白道のこれまでの歩みを焼く事とされる。

この注釈を、それぞれ四諦八正道に照らし合わせるならば、二河白道の行者が西岸に至までの東岸及び白道の歩みを重ねて行く全ての過程を苦諦、西岸を苦が滅した状態である滅諦、東岸と火の二河を併せて貧瞋痴の「三毒」とするならば苦の原因とする集諦、中間の白道四五寸は浄土に至る道とするならば道諦に相当するといえる。

また、西岸を苦痛から解放された状態、東の岸や人無き空過の沢及び郡賊悪獣、水火の河は苦悩及び苦悩の要因、白道を苦痛から解放に至る過程と見ることもできることから、この注釈は、行者が抱える苦悩、苦痛、解放に至る過程の要素及び因子の説示と捉えられる。さらに、水火の波や火炎が白道の染汚や功德の法財を焼く様子は同時に、新たな枠組みの生き方による白道の歩みを重ねつつも解放に至るまでは苦悩の原因で挙げられた三毒自体は無くならない事の説示ともいえる。

2.5 行者の生き方の枠組みのパラダイムシフト

(訳) 行者が白道を真直ぐ西に向かうことは、衆生の諸々の行いや業を廻向し、浄土に生まれたいと信じて真直ぐ西の方向に向かう事の譬えである。

この注釈は、行者は諸々の行いや業を廻向する事により、行者自身の「苦悩の自覚」から「苦痛からの解放の過程」へと転換される要素、因子の説示と捉えられる。

2.6 阿弥陀如来と釈迦如来の働きによる苦痛からの解放

(訳) 行者が東岸の人の声の勧めを聞いて真直ぐ西の方向に向かい歩むことは、釈迦如来は既に入滅せられて後世の人々はその人の姿を見奉ることが叶わないが、衆生が仏教や仏法を自身の心身の拠り所として歩みを重ねる事の喩えである。これらのことを声の様に譬えた。行者が白道を一歩二歩と歩みを進めると暫くして郡賊悪獣が行者を喚び戻すことは、この教えの別解・別行・悪見人等がみだりにそれぞれの見解を説くことで互いに惑乱を起こすこと、そして自らの罪を造り出すことの喩えである。西岸に人が見え行者を喚ぶ事は、阿弥陀如来の願意の譬えである。

この注釈は、白道を歩む行者が死ぬ事を自覚し煩惱による支配の気づきを理解しようとする「苦痛」からの解放の方向に向かう過程の場面の構成要素及びその要素を構成する因子の説示と捉えられる。従って、この注釈は、行者が「苦痛」からの解放の方向に向かう過程を歩む際に生ずる不快な情動の要素や因子の説示といえる。

(訳) しばらくの後、にわかに西岸に至り、善き友と出合い慶び楽しみが已む事は無い事は、衆生が長い間生と死を繰り返し、計り知れない程の長時間輪廻転生を重ね、迷いや自分自身に縛られることにより解脱することがないことの譬えである。そして釈迦如来が見そなわし、衆生を西方に導かれる事、同時に阿弥陀如来の慈悲の御ころにより西岸に行者を招来して頂く事を頼りに、衆生が二尊の御導きに信順して水火の二河に囚われる事無く、また、ためらいや疑いをもたず阿弥陀如来の眼力の道を歩み、命を捨てて阿弥陀如来の御国に生まれ変わるにより仏と遭う事で、慶びや楽しみが極まらないことはない事の譬えである。

この注釈は、釈迦如来や阿弥陀如来の御はたらきに依り、行者が死ぬ事を自覚し煩惱に支配されていた気づきを理解し、行者が死ぬことの理解の段階に到達した場面と善導が解したことから、行者が「苦痛」から解放された状態の構成要素及び因子の説示と捉えられる。

(訳) そして、全ての行者がこの教えを時期や昼夜を問わず常に修することに努め、この譬えで描かれた観想をなすことから、廻向発願心と名付

ける。また、廻向とは、阿弥陀如来の御国に往生することにより大悲心を起こし、衆生の生と死に廻り入ることによって衆生を教化することもまた、廻向と名付ける。三心が既に備われれば行は成就しないことはない。願業が既に成就し、浄土に往生しない理由はもはやない。また、この三心は、定善に通ずるものである。よくよく覚えておくべきである。

最後に善導は、この教えに触れた全ての人々に対し、廻向発願心及び構成する要素や因子及び、行者に至誠心・深心・廻向発願心の三心が備われれば、今までの生き方の枠組みから新しい枠組みへの転換である苦悩から苦痛への転換、そして苦痛から解放される過程に必ず到達することを説示し、二河白道の譬えの注釈を締めくくる。

3. 愚禿抄からみる親鸞の二河白道を構成する要素及び因子

ところで、親鸞は、善導の二河白道の譬えに多大な関心を寄せており、『顕浄土真実教行証類』の信の章の別序を加えた信巻や『愚禿抄』下巻にてそれぞれこの譬えの親鸞の注釈を加えている。そこで、この項では、親鸞が説示した二河白道の譬えの物語を構成する要素や行者に影響を与える因子を今回は主に『愚禿抄』を中心に明確にするを試みる。

親鸞は、二河白道の譬えの全体状況及び場面構成を、西岸を浄邦である極楽浄土、東岸を穢国、東岸から西岸の間には水火の河が流れる、東岸と西岸に白道が渡河される、行者が釈迦如来・阿弥陀如来に導かれ西方に向かい白道を渡河すると示す。このことから、善導の二河白道の譬えと親鸞の二河白道の譬えの両者間では、物語全体の進行や結末に影響を及ぼす新たな人物や事象の登場等の大きな齟齬は総じて認められない。しかし、場面を構成する具体的な要素・因子に差異が認められる可能性があるため、以下、具体的に検討する。

まず、親鸞は、二河白道の東岸に譬えられる群賊悪獣の要素をそれぞれ、群賊を別解、別行・異見・異執・悪見・邪心・定散・自力の心、また

悪獣を六根・六識・六塵・五陰・四大⁶とした。また、郡賊悪獣を自力の心の郡賊と、凡夫の心身の悪獣の二つの因子にさらに区分した。また、人無き空迥の沢は、悪友、すなわち「善友に対す、雑毒虚仮の人」、に随うことにより真の善知識に値しない⁷事の譬えとし、真と仮・偽及び善知識と悪知識との対比を行うことで、真の善知識とそれ以外の善知識の要素に区分した。

ここでいう親鸞の示した東岸の郡賊悪獣の群賊と人無き空迥の沢の「善友に対す、雑毒虚仮の人」は、この譬えの目的が、浄土教以外の教えを奉ずる者からの法難を防ぐためであることから、浄土教以外の教えを奉ずる者が往生を願う者も含めた心的構造・機能及びそれらを行者にもたす要素や事象の因子も含まれる。そして、悪見人を『「悪見人等」といふは、驕慢・懈怠・邪見・疑心の人なり』⁸の要素に分け、悪見人による東岸からの喚びかけは、行者に白黒ともつかない混在した道の路を歩む迷いを生じさせる因子とした。

続いて、親鸞は白道を、「白の言は黒に対す、道の言は路に対す。白とは、すなはちこれ六度万行、定散なり。これすなはち自力小善の路なり。黒とは、すなはちこれ六趣・四生・二十五有・十二類生の黒惡道なり」⁹とし、生き方の志向を白道と黒惡道の2つの要素に区分した。そして、それぞれ白道の六度万行及び定散と、黒惡道の六趣・四生・二十五有・十二類生の黒惡道の生き方の志向の2つの因子に分けた。同時に、白道と黒惡道はさらに道と路の要素に区分した。また、水河の川の幅を「人寿百歳に譬ふるなり」¹⁰と示すことから、白道の長さは、今生の行者の人生の長さ及び行者の人生の歩み、すなわち行者の今生の生老病死の生の営みの積み重ねとした。そして、白道の幅を『「四五寸」とは、四の言は四大、毒蛇

⁶ 浄土真宗聖典編纂委員会『浄土真宗聖典（註釈版）』本願寺出版社、1988年、536頁。

⁷ 同上、536頁。

⁸ 同上、538頁。

⁹ 同上、537頁。

¹⁰ 同上、536頁。

に譬ふるなり。五の言は五陰、惡獸に譬ふるなり』¹¹と示すことから、白道の幅の四を四大の譬え、並びに五を五陰の譬えの要素に区分した上で、白道を、①全ての物質の構成要素及び毒蛇の貪瞋痴の三毒と、②行者の心身の煩惱の積み重ねの因子に区分した。また、行者の白道での一分二分の歩みを『「あるいは行くこと一分二分す」といふは、年歳時節に喩ふるなり』¹²とし、行者の白道の歩みは今生の人寿百年生老病死の生の営みの積み重ねであると示した。さらに、親鸞は、極樂浄土に往生させて頂く事を願う清らかな心を『能生清浄願往生心』といふは、無上の信心、金剛の真心を發起するなり、これは如来回向の信樂なり』¹³とし、行者がこの上ない信心、つまり極樂浄土の往生を願う金剛のごとき真心を發起する事を示す。同時にこの真心は、阿弥陀如来の御はたらきによる信樂であると示す。このことで、行者の白道の歩みの自覚は、行者自身が極樂浄土への往生を願う事は、阿弥陀如来のはたらきによる信樂なしには不可能であり、行者自身が白道・黒道もしくは白路・黒路の何れの歩みを重ねているかの自覚すら出来ない事が説示されるといえる。これは、ケネス田中のいう「岸に辿り着くために自力で群生の海をもがき続けている」¹⁴事の自覚すら出来ない状態にあると言える。

次に、西岸に阿弥陀如来がまみえる様子を、『また、西の岸の上に、人ありて喚ばうていはく、「汝一心正念にして直ちに來れ、我能く護らん」といふは』¹⁵及び『「西の岸の上に、人ありて喚ばうていはく」といふは、阿弥陀如来の誓願なり』¹⁶の説示により、行者の生き方の方向性が、白道あるいは黒道の歩みかを行者自身が判別できない小道の路の歩みの状態に置かれながらも、西岸に見そなわす弥陀の誓願により行者の方向性が西方

¹¹ 同上、538 頁。

¹² 同上、538 頁。

¹³ 同上、538 頁。

¹⁴ ケネス田中、島津恵正（訳）、『真宗入門』、法蔵館、2003 年、1-5 頁。

¹⁵ 浄土真宗聖典編集委員会『浄土真宗聖典（註釈版）』本願寺出版社、1988 年、538 頁。

¹⁶ 同上、538 頁。

に導かれる事が示される。以下、西方の阿弥陀如来の関係性の具体的な因子がそれぞれ説かれる。

まず、行者自身を『汝』の言は行者なり、これすなはち必定の菩薩と名づく』とし、行者を構成する因子を必定の菩薩と名付け、具体的な因子をそれぞれ龍樹大士の即時入必定、曇鸞菩薩の入正定聚数、善導和尚のいう希有人、最勝人、妙好人、好人、上上人、真仏弟子に相当する¹⁷と示す。また、行者の三心が一つになった心を「真実の信心」、「正念」、「選択摂取の本願」とし、この本願を唯一の浄土に往生する為の行で金剛の様に壊れる事の無い心のありようとした。そして、行者と西方の阿弥陀如来の関係性を、『直』の言は、回に対し迂に対するなり。また「直」の言は、方便仮門を捨てて如来大願の他力に帰するなり、諸仏出世の直説を顕さしめんと欲してなり』¹⁸とし、行者から西方に見そなわす阿弥陀如来との関係性の方向が示される。同時に『「来」の言は、去に対し往に対するなり。また報土に還来せしめんと欲してなり』、『「我」の言は、尽十方無礙光如来なり、不可思議光仏なり。「能」の言は、不堪に対するなり、疑心の人なり。「護」の言は、阿弥陀仏果成の正意を顕すなり、また摂取不捨を形すの貌なり、すなはちこれ現生護念なり』¹⁹とし、西方から呼びかけられる阿弥陀如来と行者の関係性の方向が示される。さらに、両者の呼応関係は『「念道」の言は、他力白道を念ぜよとなり。』²⁰から、阿弥陀如来の願力に依りすでに存在する白道を、行者がその白道をただひたすら念じて歩みを重ねることにより成立すると説く。加えて、極楽白道の歩みを重ねる事により浄土に往生した際の慶びと楽しみを、『「慶楽」とは、「慶」の言は印可の言なり、獲得の言なり、「楽」の言は悦喜の言なり、歓喜踊躍なり』²¹とし、行者が至るであろう西岸を構成する因子が示される。

¹⁷ 同上、538-539頁。

¹⁸ 同上、539頁。

¹⁹ 同上、539頁。

²⁰ 同上、539頁。

²¹ 同上、539頁。

続けて、『「仰いで釈迦発遣して、指へて西方に向かへたまふことを蒙る」といふは、順なり。「また弥陀の悲心招喚したまふによる」といふは、信なり。「いま二尊の意に信順して、水火二河を顧みず、念々に遺るることなく、かの願力の道に乗ず」といへり』²²の言より、行者が東岸より釈迦如来により仏法の教えに従い西岸に進むべき方向性と、行者の阿弥陀如来の大いなる慈悲の御心による白道の歩みの積み重ねを示し、西岸の極楽浄土に至らしめる呼びかけの順と信の呼応関係の因子を説示する。

その後、親鸞は、内と対の対比により、至誠心をさらに難と易、彼と此と来 毒と薬、至誠心の質の因子に区分する。

また、三心を、①観経により表された自己の自力の心の側面の「自利の三心」と、②『観無量寿経』の隱彰による阿弥陀の利他回向の他力の信心の側面の「他力の信心」との2つの側面²³に区分した。

加えて、白道を歩む行者の生き方の指針を、①阿弥陀如来の第十八願の他力により、行者が信の一念に至らしめられると同時に正定聚の位に到達かつ位が定まり、難思義の真実報土の往生をとぐ「即往生」と、②自力行者の自力の諸々の機は各々異なる業の因、果の成立であるが故の第十九願、二十願により胎宮・辺地・懈慢界、双樹林下往生の難思であるが真土に至らない境地の化土に往生する「便往生」²⁴に区分した。

これらを併せて鑑みると、親鸞の「自利の三心」と「他力の信心」との2側面の区分により、白道は「利他の三心」の因子、黒道は「自利の三心」の因子を持つと考えられる。同時に白道は、阿弥陀如来、釈迦如来の第十八願による「利他の三心」に照らされた白道の歩みを重ねる事による「即往生」の果成の指向性をもつ因子が含まれ、黒悪道には、自力行者の自力諸機各業因果の第十九願、二十願の「自力の三心」により光を遮られた黒道の歩みを重ねる事による「便往生」の果成の指向性につながる因子

²² 同上、539－540頁。

²³ 同上、541頁。

²⁴ 同上、542頁。

が含まれると解することができる。

また、東岸から西岸に至る道は一本で描かれる事から、親鸞が示した白道を構成する要素は、白道と黒悪道の方向性が混在すると解せる。このことから、道に対する「路」の譬えを、行者があたかも光に照らされた白道に落とす影により路に狭まった様に見える様相とし、その光の部分「白路」、落とした影の部分「黒路」と喩えたと解することができる。そして、阿弥陀如来、釈迦如来の第十八願による「利他の三心」により照らされた白道が、先に挙げた水火の河と東岸からの「三毒」により照らされた部分の道幅が四五寸の幅に狭められることに加え、「自力の三心」と「他力の信心」との三心のバランスの齟齬により生ずる影により光が遮られた喩えを示すための諸因子が含まれていると解せる。このことは、黒道の因子、すなわち信心に自力の側面が残る路が存する状態は、行者に「便往生」による因子の指向性の因子を生じせしめ、行者がこのままでは化土に往生する果の因子の形成に繋がることと解することができる。

以上の事を、行者の人生の位置づけを見失う状態を見出す事が不可能であることや、行者と阿弥陀如来・釈迦如来による仏法の教えとの呼応関係、白道と黒悪道の構成因子を踏まえて鑑みると、親鸞が説示した二河白道の譬えの描写は、①あたかも白黒ともつかない路の歩みを重ねる行者が、かすかな法の灯火を頼りに、行者が苦悩に苛まれながら暗闇の道の歩みを積み重ねる因子。②行者の歩みの途上に、既に往生した先達の廻向により束ねられた計りしれない光や釈迦如来の仏法の教えや阿弥陀如来の願力の因子。③突如スポットライトが当たるが如く白道が照らされ、行者が生きる全ての過程が照らされる因子。④行者が光に照らされた白道がある事に気づく因子。の主に4つに整理づけられる。このことから、親鸞が説示した二河白道の譬えの描写は、行者がこれらの因子により構成された過程を、釈迦如来の教え及び阿弥陀如来の願力により白道上にて認識する描写と解する事ができると考える。そして、親鸞が説示した二河白道の譬えは、さらに白道すらも行者自身が認識することが不可能な過程を歩む状態も説示することから、善導が説いた二河白道の喩えに対し、行者が西方に

向かう過程においてさらにダイナミクスさを含有した教えであることが伺える。

4. 結果

①善導が説いた二河白道の喩えをそれぞれ、前半部分を「行者の苦悩」・「行者の苦悩の自覚」・「行者の苦悩からの解放」、後半部分を「行者の苦痛からの解放の因子」・「行者の生き方の枠組みのパラダイムシフト」の項目に区分して訳出して整理した結果、浄土教における死に臨む際に生ずる人間の抱える不快な情動は、善導により説かれた二河白道の喩えに拠ると「苦悩→苦悩の自覚による苦痛への転換→苦痛からの解放」の三つのフェーズの過程を辿り解放されることを見出した。

②善導・親鸞両者の二河白道の譬えの前半部に描かれた物語の状況及び場面設定の認識は、新たな登場人物が登場するなどによる齟齬は認められないが、状況及び場面の因子に差異が見られた。

5. 考察

現在私は、緩和ケアの分野の痛みの概念や捉え方と、大規模災害時に引き起こされるとされる命の選別の問題との両者の相関を、自己と目に見えない関係性の側面の苦悩である Spiritual Pain を含む「全人的苦痛」・「QOL」及び「関係性」のキーワードを用いて検討を加えてきた²⁵。このことから、二河白道の「苦悩→苦悩の自覚による苦痛への転換→苦痛からの解放」と、全人的苦痛の概念でうたわれる“Pain Relief”（苦痛からの解放の過程）との相関性を鑑みると、二河白道の前半部分は、行者の苦悩からの解放の過程の要素や因子を示すことから、緩和ケアにおける苦痛からの過程を意味する“QOL”に相応すると考えられる。また後半部分は、行者の苦悩からの解放の過程に至るまでの具体的な要素や因子を示すと考

²⁵ 今井崇史「非代償性災害における命の選別の問題―浄土教から見るケアの現状と課題」(『日本仏教心理学会誌』第3号、2012年)、136-150頁。

えられる事から、“Total Pain (全人的苦痛)”の各因子に相応すると考える。そして、本論文の検討により、二河白道の喩の人間の苦痛からの解放の過程は、「苦悩→苦悩の自覚による苦痛への転換→苦痛からの解放」の三つのフェーズに区分可能である事が明確にされたことから、大規模災害時の各々の現場におけるフェーズ管理による災害情勢の把握に際し、浄土教を基盤とした倫理価値判断基準を持つ多専門職ケアチームの一員としての視点から他のスタッフとの間で情報共有を図る事が可能になると考える。

次に、親鸞の著した『愚禿抄』を手掛かりに、親鸞が示した二河白道の譬えの廻向発願心の場面理解及び各因子を検討した結果、今後、『顕浄土真実教行証類』の信の章の別序を携えた信巻及び愚禿抄の各文献を始めとした親鸞の二河白道の譬えの基底をなす二河白道以外の箇所の詳細な比較検討を加える必要が有るが、善導の注釈に依り配された要素、因子とは異なる点が認められた。

特に、親鸞が説示した二河白道の譬えの描写から、東岸→白道→西岸の東岸のプロセスを辿る事すら自覚できない凡夫であるが故に、阿弥陀如来、釈迦如来のはたらきに拠り白道にすでにいることに気づかされる事が伺えた。

また、両者の譬えの説示の比較により、善導の説示した生き方の枠組みの転換点と、親鸞が説示した行者の生き方転換点に差異が認められる可能性が示唆された。これにより親鸞が説示した行者の従来の生き方の枠組みは、新たな生き方の枠組みで白道の人生百年を既に生きていることを釈迦如来の教え及び阿弥陀如来の願力により気づかされる事で行者は新たな生き方の枠組みへと転換されると考える。また、親鸞の説示は、行者が阿弥陀如来及び釈迦如来のはたらきにより、今世に生まれて生きている過程ですでに業が成就し、西岸の浄土に往生が定まると解せることから、今後、二河白道を軸に親鸞の解した教えをさらに理解する事により、主に「臨終まつことなし、来迎たのむことなし」(『末燈鈔』)と説示される、浄土真宗における平生業生の教えとの関連性を見出す事に繋がる。そして、この死の形は問わない概念と「いのちの選別の問題」との関連を検討すること

により、浄土教を基盤としたケアスタッフとしての倫理価値判断基準の明確化に繋がると考える。

加えて、行者が持つ生き方の枠組みの気づきの由のさらなる検討により、①念仏は、凡夫が阿弥陀如来及び釈迦如来のはたらきにより新しい生き方の枠組みに既に生きていることに気づかされることによる報恩感謝の念から唱えること、②聴聞の場は、行者が生きる全ての過程が照らされてこれまでの東岸からの行者の歩みの積み重ねの全体像が照らされる場及び白道を歩ませて頂いていることの自覚を積み重ねる場。また、教えに説かれた阿弥陀如来、釈迦如来に感謝しその報恩から念仏を唱えさせて頂く場。である事がさらに明確になり、今後の浄土真宗におけるケアの概念化に繋がると考える。

特に、浄土真宗本願寺派が取り組む教えの具体的な実践活動であるビハーラ活動は、阿弥陀如来、釈迦如来のはたらきによる白道の歩みの積み重ねに気づかされる実践活動であると捉えられる。このことから、今後、多専門職集団からなるケアチームスタッフとしての行動指針の策定の際に二河白道の説示は多大な有用性を持つと考えられる。

6. 結語

今後、本考察の検討のさらなる継続が必要であるが、本論文の検討により、浄土教を基盤とする仏教者が現在進行中もしくは将来に発災すると考えられる大規模災害の現場に浄土教を基盤としたケアスタッフとして積極的に参画・寄与する基盤の醸成に繋がる事が見出せた。

また、善導と親鸞が説いた二河白道の譬えの各因子の検討により、浄土真宗の教えを基盤としたケアの概念化に繋がる可能性をもつ事も見出した。

最後に、今回の論文で善導及び親鸞の説かれた二河白道の譬えを取り上げた。しかし、二河白道の言葉の自己の恣意的な訳出や理解、また二河白道以外の教えとの相関性の検討不足による言葉の表層的な理解等、いわゆる教学的な見地からの理解が不足していることは否めない。そこで、今後

非代償性災害時におけるトリアージが招く「命の選別の問題」に対する
二河白道を基盤とした非身体的側面からのケアリングの模索

はこの論文をあくまでも「叩き台」として提示し、さらに諸先生方の様々な見地からのご示唆・ご教導を賜りながら自己の理解の修正や深化を図ることによりさらに論文の目的を果たすべく二河白道の教えの理解を深めていきたい。